# ネパール夢の記

-第7次ネパール・三カの会教育支援の旅-

2003.01.26～02.02

# 夢の記


○第7次教育支援の旅　斉藤　謹也
○また来年に希望をつないで　大石　トキ
○回を重ねて初めてのことばかり　和田　泰子
○お世話になりました　沼野　和子
○第7次支援旅行雑感　浜崎　ヤスエ
○霧のナガルコットそして雲と追いかけっこのマウンテンフライト　松浦　陽子
○自分育ての旅　加藤　雅子
○菜の花咲き乱れるネパール　掛川　和子
○初めての支援の旅に参加して　岩田　泰子
○静かな時の流れの中で　木幡　久美子
○再訪の責負うた初旅　梶　和愛
○初めてのネパール　小宮山　美樹
○ネパール教育支援の旅に参加して　小川　直子
○ネパールという名の国に行き・・・　小張　泰洋
○あまり深く考えないようにしよう　大谷　安宏


**2003年に実施された第7次ネパールミカの会教育支援の旅**

**夢と感動の旅**

# 第七次教育支援の旅

団長　斉藤　謹也

二〇〇一年九月十一日に起こったアメリカ同時多発テロは、全世界に深い深い傷をつけました。その為、この緊張状況に対して旅行客は半減し、旅をするにも不安、不信がつきまとっています。特にわがネパール・ミカの会のような、一年間の国内での支援活動をまとめた後、**自分の眼で確かめながら**、教育支援の旅をすることを柱に、ささやかに、ゆっくりと、でも着実にと実戦している、小さな小さなNGOにとって、厳しい事態となっています。

特に一昨年夏の国王一家の悲劇とネパール国内の世情不安定の中にあって、政府とマオイストの紛争は実状を知らない私達や家族を不安におとしいれています。さあ、わがミカの会をどうするのか、という命題を抱えて、「でもこの厳しい状況だからこそ、さらに乗り越えていきましょう。」と決意し、その決意のあらわれとしてNPO法人格を申請することとし、二〇〇二年秋に提出いたしました。つまり継続という事を明確に一般の方々にも分かってもらう形としてNPO法人申請（今春三ー四月認可予定）であるといえましょう。

又、第七次ネパール・ミカの会教育支援の旅も、平成十五年一月二十六日ー二月二日まで予定通り実施することとしました。

熱心な会の運営メンバーがそのまま支援の旅参加者となる形が主体ですが、それでも今年は十五名参加の中に、若い団員三名も加えての支援の旅となりました。新しい息吹も感ぜられる旅行団となったように思われます。

正式な派遣団として年一回の旅行ですが、同じような旅程であっても、建設校、支援校が増えるにしたがい、少しずつ変わっていっています。静かな所からくる喜びであっても、深い感激が味わえているように思われるです。

それはまず、今年の校舎増設工事完成式に参加しましたが、それは大石トキさんの全面寄贈による校舎であり、無事建ち上がった事の喜びです。シリ・スンディ小学校開校式。集まった村人や子ども達の服装からも貧しさがひしひしと分かるつらい現状でありますが、それにも増して人々の喜びの表情が伝わってくる良い開校式でした。それに大石さんのご挨拶。支える和田さんの晴れやかな顔。ボランティアの真骨頂が、この親子の絆に表れているように思えました。

又、ルンビニ地域の既支援校の校長先生方との会食も、一つの前進の表れでした。

タンセンの学校関係者との交流の提案は、このルンビニ地区との教育力向上の為に欠かせないものとしての提案であり、ミカの会要望として強く申し上げましたが、中間調査の時の地ならしのせいもあり、各学校長とも「良い提案として受け入れ」を表明されたことは嬉しい事でした。ルンビニ地区の教育力向上に向けて、一歩前へ進んだように思えます。

二〇〇三年度には、よい形でプロジェクトが組め、実施に向けて歩み出せると思います。タンセン地域では、トリヴァン大学理系校における共同贈呈式が行われました。なにしろ、図書及び備品贈呈校が八校にもなり、それぞれが熱心にミカの会に感謝し、持続を願う演説をされるので、これがなかなかの時間を要してしまいます。

来年度は何とかこの贈呈式が短縮でき、もっと青年達と直に接するよう時間をふりむけたらと思いますが、国柄の違いもあり、これはなかなか難事であるかと思います。学長と教授達との会食も、会を重ねてすっかり顔なじみになりました。タンセンの街並みを歩いていても知り合いが増えてきたことを実感します。又、モホン女子校やセン小学校生徒との交流会も今年は実現でき、「最近ミカの会は来てくれないね」という生徒の声に応える事ができたように思われます。もっと事前に準備していかねばと反省点もあります。又、ワーキング・チルドレンの為の小学校にも全員で訪問できたこと、准看護婦養成所へのあわただしい訪問（素晴らしい景観、リーダーの医師の熱意、学生達の意

欲あふれる目）等、タンセンの新しい面が開けてきたように思います。

首都カトマンドゥ・パドマカニヤ校への訪問もすっかり定着し、雪山童子奨学金による十二名の奨学生とも会えました。ヌルブラマ校長の日本人学校訪問も、その発展ぶりに安定ぶりがうかがえて良かったと思います。

旅全体にいえる事は、つい私達は慣れるに従い省略しがちでありますが、ネパールの人々にとっては、年一回の交流訪問を楽しみに待っていてくれるようですから、学校訪問や施設訪問が短時間でも出来るようにしなければと思います。相手にとっては訪問を省かれるという事は、もう来年はミカの会の支援はないのだというように、不安を与えてしまう事になりかねませんから。「ていねいに」「ていねいに」一つ一つ実際の目（ミカ）と目（ミカ）を合わせて行う事が大事であることを確認しながら、今年の支援の旅、無事に終えたことを感謝します。でも、だんだんと体力的には厳しい日程です。無理せず、焦らず、自分と相談しながら、素直に続けていく事が大切と思われます。

今年はナガルコットの丘、タンセンの丘の景色は全く見えず、ヒマラヤの雄姿が仰げなかったのは残念でした。実行月の設定に問題がありました。宿題として残ったようです。

今年も三校ほど、ルンビニ周辺の学校から校舎建築要望があったりしました。又パドマ・カニヤ女子校の講堂要望もあり、なかなか心忙しいことですが、来年度（平成十五年度）のNPO法人発足の事もあり、今年は視察や調査を行わず帰国しました。

それにしても、支援の旅の参加メンバーやネパール・ミカの会の仲間達の精力的で奉仕の精神あふれていることに、あらためて目をみはります。「ともに学び、ともに修める」ことを実践を通してできる善き友です。スペインのことわざに「誰と暮らしているか教えてくれ、そうすれば君がどんな人間かあててやろう」という言葉があるそうですが、私達の日常生活において、どういう人々と交流しているか、いかなる人を友人として選んでいるかは、とても大切なことです。「支援」が柱でありますが、それを通し

て善き友と交流できる幸せを思います。

中国のことわざにも「蓬（よもぎ）は麻中に生ずれば、たすけずして自ら直し」とあるようですが、まっすぐ伸びる麻の間に曲がりやすい蓬を植えると、自然にまっすぐ育つものと言われます。善い友、善い心をもった集団ミカの会の会員の皆様の一年間の思い出を届けにネパールに行ける事を幸せに思います。

最後に、心配していた政府とマオイストリーダーとの間に紛争終結の会議が持たれ、無事妥協したとの報が飛び込んできたのは、カトマンドゥでのモティ君からでした。

まだこれからどうなるかは、予断を許しませんが、やはり、良い報せ。でも、マオイスト達は外国人観光客には絶対に手を出さなかったから今でも安全だったのですよ、というのはネパール人の言葉。そういわれても数人で行ったパタン市内の保育所で四、五才の子ども達から「あなたはどちらの人間か？（政府側かマオイストか）銃を持っているか？」と聞かれた時は正直びっくりしました。市内の治安状況が今以上に回復することを祈りながら、今回の報告とします。

# また来年に希望をつないで

大石　トキ

三日間、雨の洗礼を受けた後、タンセンからルンビニに向けて出発しました。タライ平原をバスにゆられ、まずスンディ小学校へと向かいました。山の無い大平原には、至る所菜の花畑が広がり、沿道にはマンゴウの巨大街路樹が続き、牛や山羊等と一緒に大自然と共存している村の様子に昔を偲び、郷愁を感じました。

寸前の雨の為、スンディ小学校落成式会場の設営には、大変なご苦労があったようでしたが、幸い天候も回復し、村中あげての大イベントが始まりました。ミカの会の会員は高い舞台に上げられ、ネパールの国旗に花、歓迎の花のレイ、ネパール国歌、国王と学問の神に献花、そして祭壇のテープカット、祝辞と続きました。「お釈迦様の誕生した近くの、通り道沿いの学校なのに四十年近く誰も振り向いてくれませんでしたが、ミカの会の皆様と大石トキ様が神さまになって来てくれて、今日このような立派な学校に皆様をお迎できました。風のとき、雨のとき、この学校はお休みでしたが、もうこのようなことはなくなります。、、、」

との校長先生のご挨拶には一番恐縮しました。私の思いつきのような行為を、村中あげてこんなに喜んでいただき、その上、生き神様に叶なえられた私は本当に戸惑いました。

でもこれで良かったのだと、自分も村人と共に心の底から嬉しさがこみあげ、八十五年の人生で最良の日と、心に刻みました。（新築された学校を中心にしてまず教育が充実されその上で、生活全般にも向上がみられ、物、心共に豊かな村になってゆくよう、ゆっくりでいいから根気よく頑張ってほしいと思います。与えられるのを待つだけでなく、村の人々が話し合い協力して一歩踏み出して欲しいと切に望みます。みなさんが力を出し合えば必ずできる筈です。）

私も元気で長生きして、村がどのように良くなったか、又見にお伺いしたいと思います。ミカの会の皆様のお陰で、この感激を頂きましたことを何よりの宝として感謝の念で一杯です。有難うございました。

教育支援の旅を終了したあとはカトマンドゥで、真っ赤な夕焼けを眺めたり、青空に白く輝く山を眺めたり、のんびりと過ごさせていただきました。日本ではネパールについて悪いニュースばかり伝わってきますが、このように過ごしていると、のどかな日常が流れていきます。元気でいさえすれば、もう一度ネパールに行かれるかしらと、次への望みを繋ぐことができました。

この一年でカトマンドゥは道路がよくなり、信号機が増えましたが、車、バイクの量も驚くほど増え、息が苦しいほど空気が汚れてきていることが残念です。また日本に帰国した日が日曜にもかかわらず、子どもたちの声が少しも聞こえないのは寂しく、日本の将来に一抹の不安を感じました。

# 回を重ねて初めてのことばかり

和田　泰子

今年はネパールの旅十回目にして初めてのことがなんて多かったのでしょう。まず驚きだったのは気候。一月、二月は乾季で一番雨の降らない時というのが通説なのに、なんと言う降り様。ナガルコットからの低く雲がたれこめた山々の景色も、なかなかのものでしたが、やはり紺碧の空に白く輝く神々の座を見せてほしかったと思います。

教育支援の旅で心に残った一つは、スンディ小学校の落成式に母と共に出席できたことです。母の願いとミカの会の力がひとつに結ばれて、スンディ小はできあがったのだと思います。ぎっしりつめかけた村人、子どもたち、先生方の前での挨拶は母の晴れ舞台であり、校舎のテープカットは一生の思い出になったことと思います。私のつたないネパール語での挨拶、習いたてのほやほやで胃の痛む思いで、したのですが、皆さんがとても喜んでくださったことも、私にとってうれしい思い出です。

また強い衝撃をうけたことは、タンセンのワーキングチルドレン校の訪問でした。ここでは故郷を遠く離れて住みこみで働きながら、少しの時間をみつけて通って来る六歳からの子どもたちが学んでいました。

少しも暗い顔をみせずはずかしそうに、でもはっきりと名前や年齢を言ってくれた子どもたち。四年生までの学力をつけることが目的というけれど、かなりの年齢になっている子どももいました。

まだまだ甘えたい年頃なのに、、、私たちはこの子たちに何をしてあげられるかと胸がいっぱいになりました。

今年も沢山、たくさんの学校をまわった教育支援の忙しくも充実した旅を終え、皆さんが帰国された後、母と私は大石一馬奨学基金のこともあり、もう一週間ネパールに残りました。その頃母の風邪はずいぶん良くなっていましたが、私のほうが風邪で熱をだし、予定はすっかりくるって

しまいました。ネパールではいつも快調でしたのでこれも初めてのことでした。だるい体でキルティプールの友達のアパートを訪ねました。彼女はお兄さんと一緒に、トリブバン大学のキルティプール校で学んでいます。アパートはコンクリートむきだしのひと部屋で、隅にうすい絨毯をひいてそこに小さなふみ机が二つとベッドが二つ、他には暖房もなし家具もなしの部屋でした。二人の専門書が壁ぎわに何重にも積んでありました。本当に質素な生活なのです。朝、七時に、ボダナートまでタクシーで三十分ほどの所をバスを乗り継いで二時間もかけて私たちを迎えに来てくれました。ボダナートに来るのは初めてで乗り継ぎがわからなかったため時間がかかったと言っていましたが、バスのほうがうーんと安いからでした。昼に母と私のためにダルバートタルカリを作ってくれました。エネルギーを極力使わない、それが出費をおさえるためとはいえ、そぎ落とされた生活を少しは見習わなければと、思ったことでした。今年のネパールはけっこう寒かったのですが、訪ねた三軒の、どの家も暖房器具は使っていませんでした。

ネパール行きの回を重ねるごとに、これからの支援のありかたに思いをめぐらせます。ルンビニの埃まみれで、はだしの子どもたちを見るにつけ、先にやることが他にある

のではと思ってしまいますが、衛生、医療、経済力、生活物資等々どれもないないづくしで、それに政治、文化、習慣の違い等がすべて複雑に絡み合っていて、どこからほどいていったらいいのやら途方にくれてしまいます。

大谷さんの言うように、今できることからゆっくり、ゆっくりやっていくしかないのでしょう。今回の旅ではタンセンの協力による、ルンビニ地区の教員の研修が校長先生方にも高く評価され期待されていること、また実施にむけて具体的に前進していることを実感しました。これから何をしていったら良いのか、少しずつ先が見えてくるようです。

そうそう、今年初めてのことがもうひとつ、今年は若い方々の参加で、いっそう楽しい旅になりましたが、塩屋の娘のほかに、ミカの会の男性アイドルが現れたのですよ。

最後に、年老いた母とこのような、思い出深い旅が今年もできましたことを幸せに思い、斎藤会長、大谷さん、ラマさんはじめネパール・ミカの会のみなさまに心から感謝いたします。

# お世話になりました

沼野　和子

大好きなネパールに行けるというのに一月半ばに風邪を引き、なかなかすっきりせず、最終の打ち合わせにも出られないまま出発当日を迎えた。朝五時半の町田はまだ真っ暗である。バスが横浜を過ぎるころやっと東の空が朱に染まり始める。

羽田、関空と乗り継ぎ、上海でのトランジットに少々手間取ったが、カトマンドゥ着八時半、三時間十五分の時差を考えると、町田を出て十八時間の旅であった。手続きも順調に進みラマさんの笑顔に迎えられて外に出る。道路は少しよくなったが、薄暗い街並みは昨年と同じようでホテル前の道のデコボコも相変わらず。明日は朝七時ラマさんの日本語学校見学という予定を聞いて、各自部屋に入る。

寒いとの情報は出発前から聞いていたが想像以上の寒さで、夜中お腹のへんが寒い寒いと思いながら寝ていた。意を決して起き上がる。まだ五時前。独り部屋の気楽さからソーット少し熱めの風呂につかる。やっと人心地がついた。湯冷めしないようたくさん着込んで七時ロビーへ行く。

ラマさんはもう待っていた。十五分ほど車で走り到着。立派な三階建ての学校である。朝七時～八時、夕方五時～六時が授業の時間だそうで、私たちが到着したときには教室で熱心に授業が行われていた。最上階の部屋は上級のクラスで、中年の日本人女性が熱心に自信を持って教えていた。生徒は五人ほどであったが、二月二十二日の弁論大会に向けての練習中。一人の女生徒が勉強の成果を披露してくれた。旅行が好きでモルジブに行きたい、海を見たいということを日本語で話す。発音は少々おぼつかなかったが、立派な日本語。黒板には日本語でいろいろ書いてある。中に「起承転結」のという句があったが、日本の大学生でも知らないのではと思った。

八時過ぎホテルに戻り朝食。トランクも出して九時半出発。バイワラ行き空港へ。女性検査官の調べはなかなか丹

念で、バッグは全部開けられた。中の小袋のチャックまであけられ口紅などつまみ上げられた。ラマさんの「何か欲しがってもあげないように」という注意の意味が分かったような気がした。

ゲートを入って紅茶など飲んで休んでいると何か胸苦しく吐き気がしてきた。トイレに駆け込みどのくらいの時間が経っただろうか。やっと気分がおさまりフラフラしながら外に出たのだが、始末にはバケツ三杯ほどの水を流さなければならなかった。トイレの外には長い人の列ができていて、皆がジロジロ見る。申しわけなさと恥ずかしさで小さくなって通りぬける。腕を貸してくださった加藤さんにすがって席に戻る。大谷さんは薬を下さったし、水を差し出してくださる方もある。ミカの会の方たちはなんと皆親切で有難い方たちなのだろうと感謝の気持ちで一杯になる。

急に飛行機が出るというので乗り場に急ぐ。二十人乗りくらいの小さな飛行機。機内でもまだ人心地がつかずにいたが、着いたバイラワはカトマンズとは違って温かく天気もよかった。これからいよいよ本番の学校訪問が始まる。愛らしい黒い瞳の子どもたちの喜びに満ちた顔にも合えた。

しかし、今年は極端に食べることに気を使って過ごしたような気がする。ルンビニの法華ホテルで持参の緑茶を入れ、煎餅やビスケットを食べたとき、浜崎さんと「これが一番安心ね」と笑い合ったことが印象に残っている。

# 第七次支援旅行雑感

浜崎　ヤスエ

十五人中の一員として今年もネパールへ行って来ました。たまたま出発直前に受けた検査結果にドクターストップが出て慌てましたが、勝手を知っているネパールということで、何とか許可をもらって参加することが出来ました。滞在中、心配していた程の体調不良もなく、また、同室の沼野さんには気遣いをしていただきお世話になりました。

ルンビニの校舎建設は今年の九校でひとくぎりということでした。その九校目が大石トキさんの寄付により建ったスンディ小学校です。落成式には是非出席してみたいと思っていました。それと、一月のネパールは一年中で一番美しいヒマラヤ連峰が望めるのではと期待していました。実際は雨に降られて生憎の天気でしたが。図書援助のタンセンでは、学校の関係者他たくさんの人たちに歓迎してもらいました。タンセンは古里以上の親しみと、心の安らぎを感じさせてくれるところです。先生方との夕食会、図書備品の贈呈式、子どもたちと交流、学校視察も沢山のスケジュールで駆け足の忙しさでしたが、終わった後は充実感が残りました。

ただ、合同贈呈式は、昨年から変わって効率的にしましたが、これから毎年のことであればもう少し簡略にしてもよいのではと列席して思ってしまいました。ラマさんも通訳も大変でした。それにラマさんから聞いたことですが、図書をタンセンに届けるのに八回も積み替えをするそうです。数百冊になる本の購入は何カ所もの店を時間を掛けて捜し集めるとのことでした。私たちの目に見えない裏の仕事の苦労を改めて知りラマさんの存在の大きさを再認識しました。

りは気持ちが和みます。木の下で勉強していた子どもたちのなつかしい姿はもうみられません。どこも教室で勉強しています。行儀も良くて表情もしっかりしてきました。

といっても、村の人たちの生活は貧しくて日々の食にも瀕し、鉛筆やノートも買ってもらえない子どもたちがたくさんいるそうです。ミカの会もこれからどんな支援活動をしていくことになるのでしょうか。

教員のレベルアップの為の研修、図書館の問題等々新たな取り組みが始まるようです。今回の支援の旅は初めて参加された方が七名、うち二十代が三名と、最近では珍しい人員構成でした。私も初回時を想いおこしながら旅を楽しみました。

ネパールの観光客は年毎に減少していて、今回は特にまばらだったようです。今回ヒマラヤが姿を見せなかったのはまた来て欲しいとのメッセージだったのかも知れません。

スンディ小学校の校舎落成式は、大石さんの素晴らしい挨拶と、和田さんのネパール語での挨拶で印象に残る式典になりました。緑と菜の花に囲まれたルンビニの小学校周

# 霧のナガルコットそして雲と追いかけっこの
## マウンテンフライト

松浦　陽子

第七次の支援旅行。私にとっては四回目のネパールです。メンバー十五名。老いも若きも熟年もいて、もう何度も行っているベテランから、初めて訪れる人もいる、バラエティに富んだ陣容で、これが又、なかなか捨てがたい、ともすれば単調になりがちな旅のスパイス的役割を果たしてくれるのです。

一月にネパールを訪れるのは初めてですが、本来乾季であるはずのこの時季、朝、霧が深かったり，予想もしなかった雨に降られたりと、今回は新たな経験をした旅でもありました。

まずいつも通り一日目はカトマンズバイシャリホテル泊、翌二十七日(月)早朝、朝食前にラマさん校長のカトマンズ日本語学校を訪問する。現在八十五名の生徒数とのこと。最上階のホールで四～五名の生徒が日本語教師(ご夫婦)の指導の下、弁論大会をしている所を皆で見学させてもらった。覚えたての日本語で一生懸命発表している女性徒の姿が印象的でした。最長老の大石さんが生徒達に元気を与える挨拶をされました。

又、会長さんも「ラマさんが校長に就任してから校内がきれいになりましたね」とほめていました。

さて最初の支援先タンセンに向けて十一時頃カトマンズ国内線空港に到着するも、朝、霧が深くて二時間遅れになるとのこと。どうなることかと思っていましたが、ラマさんの交渉で何とか一時間遅れで出発出来ることになり、ラマさんの株がまた一段と上がった次第。いつも頼りになるラマさんです。中継地バイラワはさすがに暖かく、何だかほっとする。空港を出てマイクロバスに乗る合間に寄って来た子供たちと記念写真を撮った。貧しい身なりをしているがはにかんだ笑顔はとても可愛い子たちだ。夕方美しい山上都市タンセンに到着、晴れたり曇ったり時々雨が降ったりと忙しい天候のせいか、赤土の埃っぽいタンセンがい

つもより木々や葉っぱが青々としてきれいだ。
　夜、タンセンの主だった大学・高校等の教授や先生方との夕食会があり、一人一人自己紹介を兼ね乍らの挨拶の中、一人の教授が「支援を戴いているのは勿論有難いことですが、私達は皆様の心を戴いていると思っている」と述べられ、私はその言葉がとても嬉しく、何よりのプレゼントだと思いました。
ささやかながらも、これから又、日本に帰ってバザーや寄付金集めなど支援活動をする原動力になる素敵な言葉でした。
　その夜、ホテルシリナガルでの事、九時半過ぎ、突然の停電。「園長先生!」と廊下の方から若い二人の保育士さんが会長さんを呼ぶ声。真っ暗で不安になった模様。タンセンでは停電やトイレの水、お風呂のシャワーが出ないことなど日常茶飯事、何回か訪れている私達は慣れっこになっていて、懐中電灯を必ず持って来ているが、初めての彼女達は聞かされていなかった様だ。和田さんに「ベッド脇の引出しにロウソクが入っているよ」と教えてもらってやっと一安心。何事も初めての経験は新鮮なもの・・・。
彼女達のフレッシュな感動は色んな場面でそういう事に慣れてしまった私達同行者に良い意味での刺激を与えてくれました。
二十八日(火)はトリヴアン大学で合同図書贈呈式の後、新しい支援校等、いくつか学校を訪問し、午後、モホン女子校とセン小学校の二手に分かれて、交流をする。通訳のラマさんと会長さん達はセン小学校に行ってしまったので、モホン担当の私達はネパール語が大分上達した和田さんが頼りだ。低学年の子供達と、かねて用意の折り紙を渡して一緒に遊んだり、「しあわせなら手をたたこう」の歌を一緒にうたったり楽しいひと時を過ごす。最後に校庭に出て皆で又折り紙を飛ばして遊んだり歌を唄ったりしている時に和田さんのお母さんである大石さんが輿に乗って即興で踊り出されて、場を盛り上げるのに一役買われました。楽しいお母さんです。
セン小学校組みも大変な歓迎を受けたそうです。
二十九日(水)は次の支援先ルンビニに向かう前にタンセン准看護婦養成所に立ち寄り、授業風景など見学させてもらいました。庭からの眺めは絶景で建物もホテルのように素

晴らしく、生徒達の顔もキリッと引き締まった良い顔をしていました。心臓外科医である校長先生は無料で恵まれない患者さんを診て上げていると云う素晴らしい方で、今年夏頃、研修で東京に来られるとの事でした。

ルンビニには十一時近くに到着、会員の大石トキさんの支援により新築なったスンディ小学校の落成式に出席しました。大勢の村人や子供達、学校関係者が集まっていて、盛大に式典が行われました。大石さんの挨拶を娘さんの和田さんがネパール語で通訳し、とてもほのぼのとした風情でした。お二人にとっては感慨深いものがあったと思います。とても貧しい村のようで、立派な校舎が出来て本当にミカの会と大石さんには感謝していると校長や代表者達が口々に感謝の言葉をのべていました。

主な支援を終えて一月三十一日(金)、いよいよ楽しみにしていたマウンテンフライトの日、オプショナルなのでメンバーはわずか４人です。よそのツアー客と混ざってのフライトです。しかしカトマンドゥ国内線空港は霧の中、不安がよぎる、一時間半近く待って何とかフライト出来たが、やはりヒマラヤは雲に覆われ時々、雲間からチラッと姿を現すのみ、パイロットさんは気の毒に思ったのか、十五分位フライトを延長してくれ何回も旋回して、せめてエベレストだけでも見せてくれようと努力をしてくれました。そしてコックピットに入れてもらってエベレストだけは何とか確認出来ましたが、うらめしい雲の群れでした。ラマさんによると今年は世界的に異常気象なのだそうで、ネパールも一週間前までは良く晴れていたのだとのこと。よくよく私達は運が悪かったようです。

この日はカトマンズの女子校を訪問した後、パタンに寄り観光とショッピングをし、私にとっては初めてのナガルコットにあるクラブヒマラヤに向かいました。最後の宿泊先です。晴れていればヒマラヤの山々が３６０度の大パノラマで一望出来ると云う絶好の位置に建っているホテルだと聞いています。でも、あいにく、雨が降り出し山上にあるホテルについた頃にはどしゃ降りの雨になってしまいました。次の日に期待してその夜はせめて皆で生演奏のネパール音楽を聞きながら夕食を楽しみました。

翌朝、期待に反してやはり雨模様、それでも時々雨が上

がって素晴らしい眺めが眼下に広がる。霧のナガルコットだ。霧のナガルコットも又、それなりの風情があって良いものだ。又、次の機会に期待して霧に煙るナガルコットに別れをつげた。

# 自分育ての旅

加藤　雅子

あめ、、、そして雨、、、雨のネパールだった。

三年前に初めて行ったときは、マチャプチャレの山の形の面白さに感激し、今回はその雄大なエベレストの山々をマウンテンフライトで間近に堪能できると楽しみにしていたのに、、、。雲の中から、ほんの少しの頂が見えるだけ。これはまたネパールに来なさいということなのか。しかし、カトマンドゥの街並は雨に洗われて土埃がたたず、空気がすっきりとしていた。ナガルコットの丘の草の緑と菜の花の黄色が色鮮やかで、バスから降りてあの中をゆっくり歩いてみたいと思った。また、ルンビニ公園の中を歩いている時、ずーと聞こえていたチベット佛教の平和の祈りの声。その声を聞いていると、今、そこにいる事の出きる自分をとても幸せに感じた。

「教育支援の旅」なのに、帰ってきて思い出すのはこのような事ばかり。旅は私の人生の教育のためであったかもしれない。ホテルヴァイシャリで踊りを観ながらの夕食の時、隣に座られた梶さんの息子さんに対する思いの話しは、同じく息子を持つ親として梶さんの心の広さをとても感じた。親は子供のする事を、じっと見守ってやるしかないのだと思った。大石さんはすごい方だ。かってされていた教育者としての血が充分にまだ生きていて、急に望まれてする挨拶の言葉も心の中にジーンと響いてきて、聞き入ってしまう。御自分に自信を持って生きてこられた証拠だと思う。娘である和田さんとの親子の関係も回りをほのぼのとさせてくれる。母親と娘とはどうしてもお互いに批判的にみてしまうところがあるが、それを乗り越えいたわりと信頼を持って接している。和田さんの「母がいとおしい存在となった」という言葉を聞いて涙が出てしまった。私が自分の両親に対してそんな気持ちを持てる時がくるのか、、、。いつかは、きてほしい。もっと自分を成長させ

なくてはと思う。「いとおしい」、、、、ステキな言葉だ。

今回の旅は、本当に楽しかった。日頃バザーを一緒にやっている。そして同じ目的を持った仲間との旅がこんなに楽しいとは、、、、。幸せな一週間だった。

# 「菜の花の咲き乱れるネパール」

掛川　和子

警視総監が射殺されたと云う日、我々はカトマンドゥ空港におりた。警視体制が敷かれた街中で銃を持った軍隊を見て、少し緊張気味でホテルに到着。

まず二日目は、タンセン訪問。この街についてはすてきな処だと本の中で、しばしば読み是非訪れてみたいと思っていた。又「ミカの会」メンバーでいつも話題にのぼる「塩屋の美人姉妹」とは？。ところがいやはや驚いた道中、カトマンドゥから一時間、ローカルエアーラインでバイラワの空港へ。そこからマイクロバスで約3H、谷側絶壁、山側は大きな石がごろごろ落石の跡、「ひゃー」窓側の席に座った私は生きた心地もなく、浜崎さんは、笑いながら「きれいでしょう掛川さん？」軽く云う。私はそれどころでない、途中で席を代ってもらい一息。一山越えたら突然空中都市（誰かから聞いていた）かと思われるすてきな景色が現れた。田園風景が豊かな村だと感じさせ、内心ほっとした。

さてその夜の寒い事、同室の岩田さんが、もこもこな厚手のコートを着込んで寝ていたのには驚いた。

私はカイロを数個ベッドに並べ寝た。（従って持参したカイロは二日間で消費）。期待していた世界一美しいと云う（我々のメンバーの話）夕日も朝日も小雨の為見えず、残念だったが次回訪問の楽しみに回し、とりあえず雨女（自称）岩田さんを恨むのはやめた。ほんとうに美しい村だけれど、バスに弱い私にはあまりに遠過ぎる。

その夜は、大学の学長教授らを囲む夕食会、長旅の疲れの所為か、教授らのスピーチが長く感じた。もっとも、長いスピーチはあちらのステイタスらしいが、熱い歓迎振りは伝わって来た。

三日目図書支援の為、トリブバァン大学理系、図書室、理科室等の視察と合同図書贈呈式の為ホテルから歩いて小高い丘の上にある校舎を訪問、大勢の学生（女子も含む）が外に出て待っていて歓迎してくれた。大きな目鼻立ちの

整った顔の若者ばかりだ。ラマさんが準備してくれていた図書や光学機器が役に立ち、将来彼らの中にこの国の未来を担う優秀な人が出るだろう。そして救世主となってネパールの貧しい人々を救う日が来るかもしれないと、期待の目で見るせいか、彼らの目の輝きに、一段と頼もしさを感じた。

それにしてもお粗末な研究室理科室（日本の小学校程度の実験設備、標本等）には驚いた。私達が今回寄贈したぶ厚い専門書は、ラマ君がインド辺りで手配してくれたもので、忙しいラマ君に感謝感謝。各学校の校長が、ほんとうに嬉しそうに本を受け取り、例により、長々御礼のご挨拶

（我々は高い壇上に座らされ真っ赤なレイを首にしていねむりも出来ない）、それを真剣に聞いている学生らの顔は魅力的だし、講堂の中はその熱気がすごい。つい日本の学生達は？と比較してしまった（物質的にのみ豊かな日本に育った若者と比較することも間違いだ）どちらが幸せともわからない。

四日目インドとの国境にあるルンビニへ向った。麦畑、菜の花の咲き乱れるタライ平原、これには又、又驚き、なぜ？　この様な穀類の花咲く豊かそうな景色とレンガの工場も煙を出している中にあって貧しいのか？。私の想像していた地形とは全く違っている。もっとショックなのは、土の囲いの上にチョコリと藁を載せた一見家畜小屋風な粗末な家、身なり、道路の水溜り（昨夜降った雨だ）で体を洗う人々等。

ルンビニではスンディー小学校の落成式に参加。もうすでに校庭に老若男女が沢山集まり、遅れた私達の到着待っていた。レイを一人一人に掛けてくれ賑やかな歓迎だ。壇上に座らされ見下ろすと、皆痩せて目玉だけはギョロギョロ。老人達に見えるが、いや、若いらしい。こちらに向けられた感謝と真剣なまなざし、村の子供達の未来を思う親達の顔は貧しい中にあっても同じだ。新校舎は大石さんのテープカットで開校。拍手。

次は前回建てた小学校訪問。お土産に持って行った削った鉛筆を一本づつ一人一人に手渡し「ナマステ」と目を見て握手を交わす。恥ずかしそうな嬉しそうな笑顔が可愛い。真っ黒な手で宝物を扱うように大切に受け取る。この顔が私達に喜びを与えてくれ、旅の疲れもふっ飛び、又、訪れたくなるが何だか涙が出てきてしまう。多分、次又もらえる時迄、大切にこの鉛筆を使うでしょう。それとも両親によって売られ、赤ちゃんのミルクに変身してしまうのかも？。それでも良い。（赤ん坊を抱える母親を見ても、とてもフィードは出そうもない程痩せている）。

一方窓の外では羨ましそうにその光景（教室の中）を覗いている子供達、私にはそちらばかりが気になった。学校に来られる子は幸せなのだ。さて、マイクロバスに戻ると車の中まで入り老人が物乞いする。古着を一枚あげた。

次々に来る。外にいる子供達にあめを一つずつ渡し始めると、どこからか「わぁー」と大人まで。赤ちゃんを抱く母親、藁の家の回りから湧いて出る様に集まってくる。あめも品切れ。

温暖であるはずのこの地区も今年は異状気象な為、寒さが厳しく、どのくらいの村人が死んでいるかは数字も出ないと云う現状らしい。

私はテニスボールの古いのをスーツケースに五十ケゴロゴロ入れて持って行った。前回誰かが配ったボールが、タドンの様に真っ黒になっても、大切にされキャッチボールに使われていた。

「ネパールメモ民族編」によるとルンビニはインドの洪水飢餓に苦しむ者の移住地であり、土着の諸民族とは異なりカーストも最下。元々は国境付近の民族紛争による難民とも聞いた。テレビ等では、観る光景も、現実目の当りにしたらとても悲しい。教育以前の問題だ。

私にとっては、驚き驚きの連発の今回の旅の中で問題意識ばかりが高まり、悲しい楽しい両面を持った支援旅行だった。さて、日本に戻ってから何から始めよう。私の出来る事は昨年は自分の趣味に時間を費やし過ぎたので、今年からは少しゆったり、この活動にエネルギーを注ぐ事にした。とりあえずバザーで収益を沢山あげること。

「ネパールチャ　いかがですか〜」。又美声が聞えますよ。

# 始めての支援の旅に参加して

岩田　泰子

神仏の国ネパール教育視察の旅としてネパール・ミカの会に初めて参加させていただいて、会長様始め皆々様に良くしていただいた事を最初に御礼申し上げます。

ネパールは個人的には交流のある知人がパタンに居りまして、過去数回行っておりますが、この様な学校廻り施設廻りに参加するのは始めてなので、すべての事に驚きと戸惑いを感じました。ネパールの子供達の環境の貧しさを今までより強く感じました。ミカの会の支援の誠意と偉大さに目をみはり、過去の活躍の積み重ねの結果、そしてそれに至るまでの大変さを心にたたかれ、驚嘆し、現地の先生方の会に対する信頼感を目前にして有難く、嬉しくすべての事が感激の場でした。

今まで漠然とハザーをして、お金を得て、それしか感じていませんでしたが、この旅の現実を見て少しでも又頑張って働こうと思いました。個人の力は微々たるものでも大勢が集まって資金を得、一人でも多くの子供達が勉強に勤む事が出来ればこの上なき効果だと思います。

参加して始めて知った事柄に感激したと同時に、日本人としての優しさとミカの会の益々の団結と協力を心より祈ります。

ラマ様、会長様、大谷様、皆々様本当にご苦労様でした。そして今回参加出来なかった方々の協力をも感謝致して私もこれから頑張ります。

本当に有難うございました。

'03

# 静かな時の流れの中で

木幡　久美子

三度目のネパールです。はじめての時は、エヴェレストを見るために八日間のテント泊まりで、ラリグラスが沢山咲き、桜も満開のエヴェレストロードを歩きました。帰り道、ルクラの手前で田園風景を眺めましたが、その時とても懐かしい感じがした事を思い出します。

今回、ネパール・ミカの会に入ってはじめての教育支援の旅でした。ネパールの国の将来を担う子ども達の教育支援とはどのような内容のものなのか、この目でしっかり見ることが出来ました。ミカの会を誇りに思いました。同時にこれからの事を考えると多くの難しさも感じました。ミカの会の皆さんが帰国した後も滞在し、無力な私が大好きになってしまったネパールの国の人達にどんなことが出きるのか捜す旅をしてみたいと考えました。

今私はテンディー・シェルパの家にホームスティしています。彼とは最初のネパールの旅で知り合いました。不思議な因縁を感じた若者です。ソル・クーンブの田舎で六年までは学校に行き、六年前にカトマンドゥに出て来たそうです。英語を学びトレッキングガイドになりました。彼のいとこや友達も皆トレッキングガイドですが、今は皆仕事がありません。テンディーはこれからシティーガイドも出きる用に勉強を始めたところです。今一番したいことを聞いてみましたら、日本人の先生から日本語を勉強したいということなので、私のホテル代をその費用に充てることにして良い先生をみつけました。

彼はドイツに住んでいる彼のおばさんと協同で、シェルパ語の辞書を今年中に出版する仕事もしています。子ども達は学校でネパール語と英語を習い、シェルパ語は家の中だけになっているので、シェルパ語を残すために辞書を作るのだそうです。また、シェルパの伝統的な踊りを残したいと思って、いとこと習いに行っています。とても真面目

な青年です。ここの近くにカパンゴンバがあり世界中から仏教の修行僧が来ています。三年前に来た時より建物も大きくなり、今も増築中です。とても良いところです。

こちらに来て、十年来ひかなかった流感にかかり体調が良くありませんが、だんだん温かくなってくるので、回復したら少し遠出してみたいと思います。

春を待ちながら、ビスターリ、ビスターリ　流れる時の中にいます。

カパンにて

# 再訪の責負うた初旅

梶　和愛

「ネット募集　3人自殺か／埼玉　空き室で二十代男女」―帰国して十日目の二月十二日、朝刊を読んだ。一瞬にして、帰国前夜のナガルコットが蘇った。

最高級ホテルで夕食の後一服して、プールサイドで少しのウイスキーを手に、齋藤会長、大谷事務局長、ラマさん、小張さんと歓談した。その余韻のベッドで、同室の大谷さんと話す内、きつい語調で言われたことだ。

「日本では自殺者が年間三万人もいる。ネパールではほとんどいない。多くの人が、今晩なにを食べようかと心砕く日々なんです。日本人は甘ったれてる」（大意）。むにゃむにゃとしか、答えられなかった私だった。

「老人が家の前でボケーとしてますね」といった私に、大谷さんは「テレビも新聞もない。外にいて通る人の様子、短い会話、自転車やバスなど見て、聞いて情報を得ているんです。懸命に生きてるんですよ」。百軒に電気を引いたが、使っているのは二軒だけ、月に百五十ルピーが払えないからなどなど、斜め読みしたガイドブックにはない、生のネパールを次々と教えられ、違う見方ができた。

訪問先で、言葉や言い方は違っても、ミカの会の理念を伝え、励まし、継続を約束される齋藤会長の情熱ある姿には、大袈裟でなく、感動を覚えた。

大石さんのスンディー小学校建設、カウンターサポーター・ラマさんのご苦労と優しさ、岩田さんと地域の人々とのトイレづくりには、ウルウルとなった。また、帰国してからのバザー用の品々を選び、値切る真剣な女性会員の姿にも胸打たれた。バザーなどでこつこつと積み上げた会の一年の実りを届ける大切な旅に、何もお手伝いせずタダ乗り参加の自分が、恥ずかしかった。

さて、初めてのネパールの第一印象は、日本の敗戦直後、いや、それよりひどいのでは、と思った。それがなぜか懐かしいような身近な思いとなり、心底から「がんばれ

よ」と何度も心の中でつぶやいた。帰った日本は「平和な国」というより「ノー天気な国」と思え、そこに安住する自らの「ノー天気」を恥じた。そして素直に、俺もけっしてリッチではないけれど、できる範囲でできることを続けていけよ、と言い聞かせた。

幾つかの喜びの中でも、旅の直前に亡くなった後輩の妻の供養を、マヤ聖堂でしていただいたことは、望外のことであった。

多くの悔いの一つは、トリブァン大学から一望できる西ヒマラヤの山々が望めず、マウンテンフライトも雲に阻まれ、ナガルコットの日の出も拝めなかったこと。どなたかが慰めて下さった。「もう一度来てよ、ということよ」と。そう、大失態に始まりトイレ停車をお願いする迷惑までお掛けしたのに、ご寛容下さった皆さんへのお詫びを背負って、もう一度、皆さんが支援を続ける学校と子供達を訪れなければならない、と誓っている。

# 「初めてのネパール」

小宮山　美樹

ネパールを訪れて、いろんな街を見て過ごして、みなさんはどんな事を思うのでしょうか？　街や時の流れがゆっくりな事。街の人々の優しい気持ち。貧しくても、一生懸命生きている姿・・・。など、感じ方はひとぞれぞれだと思います。このたびを通して、私が感じたことを少しここに残してみます。

私はネパールを訪れて六日目の朝。現地のデイケアセンターを訪問しました。まだ、開所時間早々であったり、子ども達の登園時間と重なってしまったのですが、先生方も快く受け入れてくださり、園内をご案内していただきました。子ども達数名が出迎えてくれ、挨拶をしていた時、一人の男の子が私の事を見つめ、ネパール語で何かを訴えてくるのです。先生に尋ねると“鉄砲は持ってない？”と言っているというのです。まさか三歳ぐらいの子どもの口からそんな言葉を聞くなんて！なんでそんなことを！と正直驚きました。いわゆる“敵か見方か”と言うことと同時に、自分の身は自分で守れという事のようです。こんな小さな子ども達の近くにまで危険が迫ってきているのかと思うと、かわいそうでなりませんでした。

言葉は通じないのですが、笑顔で「大丈夫だよ。守ってあげるからね」とこたえ、その後は、一緒に持っていった折り紙で遊び、楽しいひとときを、子ども達も笑顔で過ごす事ができました。ぎゅっと離さずにつないでいた手の感触は、今でも忘れられません。どうしたらこの子ども達が、安心して過ごせるようになるのか、私自身何かできないものなのかと、いろいろ考えさせられました。この子ども達に、一日も早く、安心して過ごせる場を・・・と願いはやみませんでした。

また、今回の旅は学校まわりがメインでした。今までも総園長先生（ミカの会会長）からネパールに学校を作っているという話を何度か聞いたことがありました。でも、実

際にピンときたことがなく過ごしてきてしまいました。どんな学校が建てられているのか。また、机を送った・扇風機をつけた・制服をプレゼントした等、一体どういうことなのか。初めての私たちにとっては、実際そのものを目にするまでは、不思議と思うことばかりでした。でも、見学するにあたり、そのことが私たちにとっては当たり前であったり、これっぽっちの物・事でも、ここネパールでは、それがとても大きく、そして貴重な物なんだとはじめて知りました。ミカの会の方々が、こんなようなことをおっしゃっていました。「お昼のランチタイムを一月の中で、一回我慢して貯金すればいい。そうすれば、ネパールへの大きな支援になる」・・・きっと、たったそれだけ?!と思うでしょう。私もその一人でした。はじめは、そんな支援とか、募金なんて・・・と思っていました。こんな少しのものでは何の役にも立たないと、考えていたのです。でも、ここではそうじゃない。たったそれだけ・・・と思うものだけで、大きな力となるというのです。そんなことができなかった自分を思うと、なんて心がせまいんだろうと改めて考えさせられることばかりでした。“できない”と思うことより、“少しでも”と思うことに意味があるんだなぁと思いました。

今回訪れた街は、貧富の差があり、行く先々でいろいろありました。どうしても、仕事柄子ども中心に目がいってしまうのですが、裸足で駆け回っている子、壊れた靴や、おしりが破けたズボンを履いている子など・・・。でも、どの子にも共通して言えることは、みんなの笑顔が可愛く、イキイキしていること。決してかわいそうでしょという雰囲気がないのです。愛想がよく、ニッコリ微笑んでくるのです。欲とかそういったものなんかじゃなく、自然と見せてくれる笑顔がとても印象的でした。ただ、単純に、私達からしてみれば、その素顔が“かわいそう”と感じてしまうのでしょうが、逆に、その一生懸命な気持ちがこちらにも伝わってきて“かわいそう”というよりも、明るくなれる、そして勇気をもらったような気持ちになりました。子どもだけに限らず、大人の方達も、誰にでも、わけ

へだてなく笑顔を振りまいてくれることが、とてもステキに見えました。はたして、私達の笑顔には、そういったビタミンはあるのでしょうか？

今回、総園長先生からお誘いを受け、私は初めてネパールを訪れました。ネパールの地を踏むまでは、そこがどんな国なのか、どんな人々が暮らしているのか等、あまり考えずに、来てしまいました。だからか、いろんなことに、感動と驚きを発見しました。きっと、この旅に参加していなければ、今も何も考えずに、あたりまえのように生活していることでしょう。“いま”“すぐ”には何もできないかもしれないけれど、まずは、少しずつ、自分のまわりでできることを探していきたいと思っています。保育園の子ども達に、自分の家族に、そして、自分自身に・・・。そして、いつか、またお手伝いできることがあったら、是非もう一度、訪れてみたいと思います。その時には、また違った目で見られるかもしれないので・・・。そして、今度は絶対、ネパールの山々、太陽をみられたら・・・！

でも、今は・・・ネパールのように、ゆ～っくり、ゆ～っくり過ごしていこうと思います・・・。

P.S.一緒に参加された方達がとても素敵な方ばかりでした。あんなふうに人生を送っていきたいなぁと思いました。いろいろな貴重なお話をありがとうございました！

# ネパール教育支援の旅に参加して

小川　直子

無知の国であったネパールに足を踏み入れると、何もかもが新鮮であった。また、羊や牛などの動物、辺り一面の菜の花畑などの大自然と、人間が皆一緒にゆったりと生活しているように感じられた。町並みや村の様子からは、ネパールの長い歴史のなかで築かれてきた昔ながらの人々のくらしをみることができた。

ネパールの教育にふれてみて、教育を取り上げるとき、政治も密に関連し、政教分離はありえないことが分かった。ネパールの国だけではなく、異文化を理解することは容易なことではないと思う。その中で、ミカの会では、小学校を教育のはじめのルートとして盛り立てていることに気付いた。校舎ができ、毎日授業ができることに喜びを感じている子どもたち。その子どもたち一人ひとりに鉛筆やキャンデーを手渡すと、ぎゅっと握りしめ、「ナマステ」と顔から嬉しさがあふれていた。ミカの会が支援していたのは、教育を受ける為に必要な、校舎、机、椅子、本などの物質的な環境を整えることから、教員の人材の育成や、村人の教育に対する理解を深めることなど人的環境を整えることと多方面に及んでいた。

どうしても家庭的な要因から小学校高学年になると女子が少なくなってしまうとのことだったが、以前より女子が増えているということは、教育に対する関心が少しずつ高まっていることにつながる。

日本は義務教育であり、私は自然に教育を受けて育ってきたように思う。タンセンの町の“塩屋の娘さん”は、学びたいという気持ちを強く持った人であった。何かを学びたいという気持ちを持つことは大切なことと思う。私も、改めて生涯いろいろなことを学んでいきたいと思うようになった。ネパールで教育を受けた子どもたちの中から、一人でもネパールの為に活躍し、国の社会的な発展が成されることを望みます。

ルンビニへ向うばすの中で、大石さん（八十五才）が、私に目をきらきらと輝かせながらお話してくれたことがあった。それは大石さんの中学卒業後から、教員生活を経て現在も福祉活動に従事しているということであった。大石さんのやさしさがにっこりと笑った目尻からあふれ、しもやけで赤くなった手からは、何かをしようとするパワーが感じられた。また、ミカの会の皆さんは、ネパールの子どもたちや学校教育について真剣に考え、実際に自分たちの目で確かめ教育支援をしようという目的をもつ素敵な方々であった。皆さんと一緒にネパールを訪れることができ嬉しかったです。

「ナマステ」とあいさつしながら心と心が通じ合えた貴重な体験をどうもありがとうございました。

# ネパールという名の国に行き・・・

小張　泰洋

土煙の香りの中、明かりは少なく、それでもバスはスピードを上げ、大きく揺れながら走る。何となく、暗闇の中にたまに見える街並。『これがネパール！』この国には何があるのだろう？　まだ着いたというだけで何も見えてこない。早く日の光が昇ってくれなくては景色も何も見えそうにないななんて、日本では想いもしないほどの夜。今まで行ったことのある、何処の国よりも異国だと始め感じたのは、そのせいだろうか。

でも、その異国という考えも日を追うごとに変わり、何か懐かしさに似たものになったと今は感じている。誰もがそうなのかも知れない。本当に不思議な国だ。

便利さなんてものはほとんど無い。必要なものではないかもしれないとさえ思えてくる。時計は要らないかも？　明かりも、日の光が明日また、昇ってくれるならば・・・

そう思わせるのは、何故だろうか・・・？

世界がどんなに忙しく駆け足だとしても、この国はゆっくりとした流れの中にあって欲しい。そう願うのは、この国の事情をよく知らない外国からの旅行者の、勝手で傲慢な思いかもしれない。

しかし、何か大切なものが失われてしまうくらいならば、いつまでもと・・・　だからなのか、私はそう願ったのだと感じる。このおおらかな国、ネパールに。

その中に行き交う人々は皆、優しく、強く、明るく、悲しく、弱く映る。余りに人間臭いのか、野性的なのか？　それとも神の側に生まれ、生きているからなのか？　誰もが、生きる喜びを知っているみたいだ。そんな中では、あまりに自分は無機質に呼吸を繰り返すだけで、死んでしまっている。

今、私が忘れかけてしまっている大切な何かを、きっと彼らは、失うことなく持っている。「きっとそうなのだろう。」そんな気がする。だからボランティアという活動を

目の当たりにしてきたとしても、今はまだ、自分はこの国から何かを学び得ることしかできない。　そう思った。知らないことが多すぎる私は、この国の一人として存在することはおろか、考えることすら出来ないだろうから・・・

知ったところで、あくまで異国の人間でしかないかもしれない。だとしても、この国のことを、この国の中に生きる人々のことをもっと知らなくては・・・

また、長い年月をかけ彼らが築き上げてきた文化、慣習等を、もっと知らなくては・・・

そう感じる今は、もっと長い時をかけてネパールを旅したいと思っている。

その中で、私は、私にとって必要なモノを探すのではなく、見つけていきたい。また、大切な数々のものを学び取っていきたい。心、感情の豊かなネパールという国にあるものを・・・

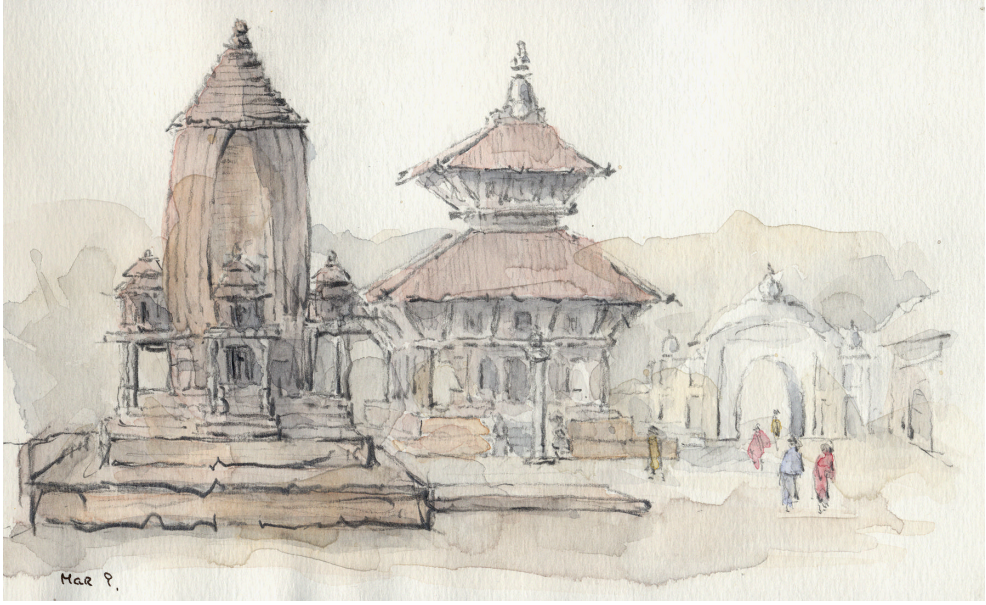
その果てに、やっと自分にとって、何かがあればと願う。

# あまり深く考えないようにしよう

大谷安宏

カトマンドゥの家並みは深い朝もやのなかに鶏の鳴き声、クラクション、人々の動きとともに明けたが、いつもと違い何時まで経っても上空に明るさが増さず、天候はあまり期待できそうもない。天候不順と寒さと知らされていたが、今回の支援の旅の先々がいささか不安を感じるが、初めてのネパール参加者にヒマラヤの雄姿を堪能してもらうためにも好天を期待したいものだ。

朝食前にカトマンドゥ日本語学院を訪れラマ校長の活躍振りを拝見することにする。さすがに以前に比べて校内の整理整頓も行き届き、壁に掲示されている資料などからも積極的な校内運営が伺える。ラマさんの表情もすっかり校長としての威厳と自信が感じられる。５人の生徒に２人の日本人教師よる授業のテーマは近く行われる弁論大会に向けての特訓で、女子生徒による“海への憬れ”を発表披露してくれた。海を見たことのない彼女のインド洋に浮かぶモルディブへの憬れと地球温暖化により水没の危機が予測される危惧を訴えるもので、$CO_2$排出国として上位にある国として、複雑な気持ちで聞かしてもらった。




一昨年地球一周の船旅で訪れたモルディブのエメラルドグリーンの海に浮かぶ島々の写真を贈ることを約してきた。

テロやマオイストの関係で空港の手荷物のチェックが厳しいことを予測し、企業からの支援計測器のマルチメータは手荷物のザックにしたが、関空での通電テストのチェックは受けたが、どうにか無事バイラワ便にも通過することができた。霧で大幅に発着の遅れの中、ラマさんの交渉でポカラ便をバイラワ行きに繰り上げ、幸いにヒマラヤの峰々もどうにか望めるフライトで窓に顔をすり寄せ見入っている皆さんの姿に安堵した。

ナグロ・レストランでの先生方との懇親会には大幅に遅れ、皆さん方を待たせてしまったが、学長筆頭に両手を差伸べ懐かしい笑顔で迎えてくれる。すっかりこちらがネパール時間になってしまった。出席の先生方の数も増え、関空で仕入れた“サントリー山崎１５年”もみるみる空になる盛り上り。継続した交流をもとにした親交はありがたい。明日からはタンセン、ルンビニの怒涛のような学校訪

問が始まる。

合同図書贈呈式はトリブバァン大学理系校講堂にて九校に五百八十二冊を寄贈し、これで延べ三千冊となった。書籍の注文から贈呈式の間、ラマさん等が十に回に亘り車への積み下ろし、一冊ごとに三箇所のミカの会寄贈印を押すご苦労があっての贈呈式には本当に頭の下がる。せめてゴム印を押すぐらいは自分達でやれる時間の余裕が欲しい。

学校訪問は新規図書支援校で「塩屋の息子」の通うジャナタ小中高校から始まり、予定外に教員研修施設マルティパルキャンパスを視察。初めてのパドゥマパブリック校、パラヨン・タラ・ダワン校、ミレニアムセカンダリ校からワーキングチルドレン校。モホン女子校でセン小学校の二手に別れての訪問とした。セン小学校の訪問は悪名高い急坂を敬遠して暫く訪れていなかったが、生徒からラマさん宛に「最近ミカの会は学校に来て呉れませんが何か先生方が悪いことでも…」との手紙を受けていたこともあり、比較的若手？グループの訪問となり、要請のあったパソコン一式を寄贈セッティングした。

久し振りの訪問のせいか子ども達の歓迎はすさまじく、皆顔が埋まるほどのレイを掛けられて目を白黒している。ここの子ども達は特に元気で無邪気で人懐こく楽しい。校長にはルンビニ地区の教員研修に積極的に協力するとの確約を得ることができた。

また、マルティパルキャンパスはルンビニの教員研修に打って付けの施設であり、今後のコンタクトをラマさんに託した。

明日のルンビニで配る品物の仕分けの間、持病の肺気腫のせいか胸が痛いと言う梶さんに二ヶ月習得したラマさんが気功を試みてくれ、大分楽になったらしい。

僅かだがお粥を食べられた。標高の影響もあるのかルンビニでの様子では延滞を取りやめ、早めの帰国を考えた方が良さそうだ。

ナガルコットの丘を降りる途中の準看護学校を立ち寄る。昨夜是非立ち寄る様に連絡が有った様で、住いを兼ねたホテルのような立派な建物でタンセンの山並みを見下ろす最高のロケーションだ。二つの教室には男女の若者が授

業を受けていた。コーヒーをと勧められるが、スンディーの開校式の時間が気になりルンビニに向けて降りることにした。タンセンは決して大きな街ではないが学校はあと幾つあるのだろうか？。さすがに教育レベルが高いと云われるのが納得できる。

やはりネパール時間の常習者になってしまった。既にスンディー小学校の校庭には４～５００人ほどのひとが集まり式典の準備は整っている。昨夜らいの雨も上がり三つの校舎と職員室はルンビニの太陽に真っ白に輝いている。校長の話では地域の人達は校舎建設はネパール政府が行っているものと思っているため、多くの人に声を掛けて外国のＮＧＯの善意によることを知ってもらったと云っていた。今回の建設支援は全額大石トキさんの資金援助によるものであり、大石さんの挨拶に続き、和田さんのネパール語での挨拶には集まった人たちも和やかな雰囲気で聞き入っていた。時折ラマさんと確認しあう和田さんをにこやかに覗き込む大石さんの光景は実にほのぼのとしていた。校舎の壁の大石さんの名前が彫り込まれたプレートに安堵の表情を浮かべる母娘によるテープカットに地域の人たちから大きな拍手が湧き上がっていた。

おめでとうございます。本当にありがとうございます。

今回、七名の初参加者に今までの支援実績を見て貰うようにラマさんと決めて怒涛のような視察が始まった。昨年に比べ整理整頓されているアディアリ小学校、シリ・マズワニ小学校、ブルーの制服二クラスのマズワニ中学校では青沼さんの用意してくれた写真を配り、風邪のため不在だった期待の保健婦の保健センター、壊された井戸のマホマディア小学校、中学校２教室を建設中のシリ・シリ・ラム、なぜか子どもたちの数が異状に多かったシリ・ルンビニ小学校と目の回るような駆け足の支援校巡りだ。

マヤ聖堂脇のレストランで夕食を兼ね各校の校長との懇談会は教員研修、図書施設の提案に「有意義なありがたい」提案と賛同を得られたが、相変らず机、椅子、柵の要望が多く、自らの努力での改善の姿勢に乏しく、提案に今一つ積極的な意見、要望が聞けなかったのは残念でもあり、実施にあたって不安も感ずる。

ルンビニ地区の学校視察はあと2校だ。４基の扇風機を付けたグルワニマイ小学校。

記念植樹も大分大きく育ったシリ・ヤナトラハ校でボールで遊ぶ子を見掛け、見せてもらうとすっかり毛の無くなったテニスボールだ。昨年来た時配ったものであろう。ここまで使って呉れているのかと嬉しい。持っていったボールと交換すると感触を思い返すように撫ぜ廻しているのが印象的だ。中野さんまた宜しくお願いしますょ。

パドゥマ・カニヤ女子校の先生方は今年もにこやかに迎えてくれ、今回の6本の書棚を加え立派な図書室になった。パタンの観光もそこそこに雨のナガルコットへ。クラブ・ヒマラヤの雰囲気に包まれるとドッと疲れが出る。学校毎に挨拶をされていた会長はさぞ疲れているだろう。生演奏のレッサン・フィーリーリに合わせての今年の踊り手は大石さん。バクタプール、カトマンドゥの観光、ショッピングと慌しい。インドから帰国したジャンモさんがフィクスチケットを延滞を繰り上げ変更して届けて呉れた。法華ホテルから電話一本で変更したラマさんに敬意。

帰国後朝日新聞コラム特派員メモ欄にバクタプル“深くは考えまい”の記事が目に付いた。内容は「こんにちは。私に本を買ってくれませんか」。ネパール中部のカトマンドゥに近い古い都バクタプルを訪れた時、少女が片言の日本語と英語で話しかけてきた。十歳の彼女は英語の勉強に辞書が欲しいが、貧しくて買えないという。名前はスジャータ。ネパールで生まれた釈迦が修行でやせ衰えいた時、牛乳で煮込んだおかゆをくれた少女と同じ名前だ。南アジアではとこでも物乞いがいるが、元締めが「ショバ代」を得て働かせている場合が多い。インドでは物乞いの「労働組合」や全国大会もあるらしい。「施し」にしても本人にいくら入るか分からないし、貧困解決にもならない。気の毒だが、ほとんどいつもやり過ごしている。この少女も新手の物乞いかと思ったが粗末な身なりながら、大きな瞳がキラキラしている。一冊の辞書がきっかけで勉強に励み、将来は大人物になるかもしれない。少し迷った末、一緒に本屋に行った。「まさか少女を使って稼いでいるんじゃないでしょうね」。店主に念を押し、百五十ルピー（約二百

三十円）の辞書を買ってあげた。「サンキュー」。満面の笑みを浮かべ、少女は走り去った。年齢に比べ、妙に堂々とした態度がすこし気になった。でも、あまり深く考えないようにしている。と。

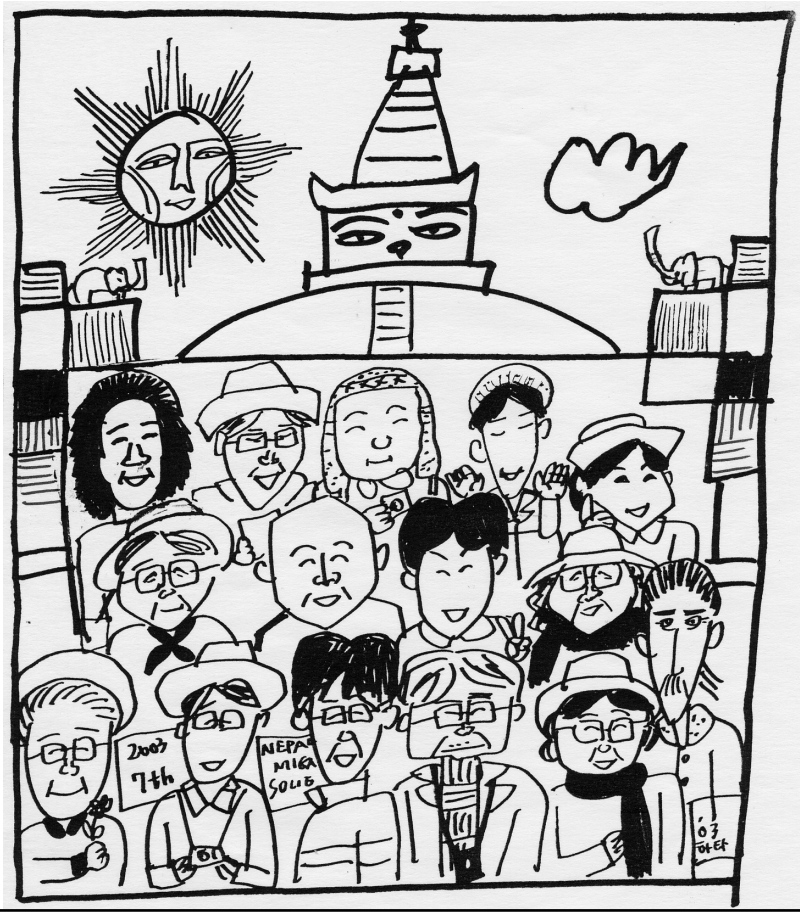
マオイストに追われて地方からやってくるのが急増しているそうで、バクタプル、カトマンドゥを歩くと今回は特に多くの物乞いが擦り寄り、「ルピー、ルピー」と云ってくる。以前は「ペンシル」「スイート」「シガレット」と云って来たが最近は殆ど聞かなくなった。まして辞書が欲しいと云われたことはない。もし云われたらつい買い与えてしまうだろうと思う反面、辞書を欲しがっている子どもたちは、多いのではないかと考えさせられる。

次回訪れる時にはシリ・マズワニ中学校に何冊が準備することも新しい支援のあり方かなと思ったりもしたが、会の課題としてＮＰＯ取得後の対応、教員研修・移動図書の計画作り、給付金先の検討、ルンビニの貧困解決の一助策、ラマさんの負担の軽減策、会報・夢の記発行、計測器支援先への報告、会の若返り策、今回の若い参加者は新戦力になって呉れるかなぁ、等々いろいろあるなぁ～。“あまり深く考えないようにしょう”と深夜便のシートにぐっすり。

第七次支援の旅本当にご苦労様でした。ご協力ありがとうございました。

まもなく桜の花も咲きますョ。またバザーで頑張りましょう。

# ネパール・ミカの会




ネパール夢の記　第7号
ネパール・ミカの会教育支援の旅
発 行 日：2003年4月19日発行
発 行 所：東京都町田市忠生2-5-36　こもれび堂内
電　　話：042-797-3975
タイトル・カット：秦　明広
版　　画：坂　育夫
写　　真・スケッチ画：大谷　安宏・小張　泰洋
公式ホームページ
http://www.ssr.co.jp/mika　　mail mika@ssr.co.jp